

2-2-7)

「燕栗ぬまっこくらぶ」の活動報告

NPO 法人燕栗ぬまっこくらぶ 戸島 潤



水田の生物多様性を向上させるには、水田耕作者をはじめ一般市民の間でも、水田が単に米を収穫するだけの場所ではなく、渡り鳥をはじめとする多様な生物の生息を支える場であるという認識を広めることが重要です。

燕栗沼周辺では、かつて渡り鳥は米を食害する害鳥とされていました。食害補償条例の制定や環境教育の実施で状況が改善し、ふゆみずたんぼなどコメやお酒の販売のパッケージに利用されたりすることで現在では野生生物との共生の象徴となっています。大崎市ではマガンのゆるきやらを制作して市の宣伝に努めています。

また燕栗沼はラムサール条約湿地への登録の際に、沼だけでなく広く水田を含めた範囲を登録したことで、水田が生物にとって重要であることを世界に知らせることができました。

これがラムサール COP10 での水田決議につながり、水田は今や生物多様性を語る上では欠かせない重要なカテゴリーとなっています。コウノトリの郷である円山川下流域・周辺水田やトキの佐渡、渡良瀬遊水地など、似たような環境にある地域と連携して、水田の生物多様性を重要視したまちづくりを進めていきます。

<<< 田んぼの生物多様性向上 10年プロジェクトへの登録内容 >>>

NPO 法人・燕栗ぬまっこくらぶ

【愛知目標】 普及啓発、各種計画への組み込み、消費と生産、保護地域、種の保全

【水田目標】

- 1-1,1-4: 環境教育活動を通じて、田んぼの生物多様性の価値の普及に努め、田んぼ 10年プロジェクトへの参加も呼びかける。
- 2-2, 2-3: 各種委員会などの場で水田生物多様性の視点を盛り込むよう働きかける。
- 5-3: ガン類と共生した農法（ふゆみずたんぼなど）の更なる普及を行う。
- 11-1: 燕栗沼で実現したラムサール条約湿地に周辺水田を含める取り組みを各地に普及する働きかけを行う。
- 12-2, 12-3: 燕栗沼をねぐらとし、周辺水田を利用する希少ガン類（シジュウカラガン、カリガネなど）の羽数回復と生息地保全・復元のための実践と普及啓発活動